

## 教育情報コーナーへどうぞ

3月は一年の総決算の月であり、来年度へ向けての準備・計画の月でもありますね。そんな3月にお役に立てる本をご紹介します。



あゆみ・通知表は、子どもたちにとっても保護者にとっても一大事。どんな言葉で励ましたらよいのか迷いますね。そんな時に。

- ・目標に準拠した通知表所見 小学校低学年
- ・目標に準拠した通知表所見 小学校中学年
- ・目標に準拠した通知表所見 小学校高学年
- ・保護者の信頼を得る通知表所見の書き方文例集 小学校低学年
- ・保護者の信頼を得る通知表所見の書き方文例集 小学校中学年
- ・保護者の信頼を得る通知表所見の書き方文例集 小学校高学年
- ・生徒の様子別 通信簿の文例&言葉かけ集 中学校

評価実践研究会編  
評価実践研究会編  
評価実践研究会編  
田中耕治編  
田中耕治編  
田中耕治編  
石田恒好他編



保護者との関係が、年々むずかしくなっています。互いの協力関係を築くためのヒントと無理難題への対策を知ることができます。

- ・困った親への対処法！
- ・保護者との関係に困った教師のために～教師の悩みに答えます
- ・保護者とうまくつきあう40のコツ

尾木直樹編  
小林正幸他編  
諸富祥彦他編



3月は学級や学年での集会活動の多い月ですね。そんなときにこんなアイデアはいかがでしょう。

- ・あなたも今日から！遊び指導の達人
- ・子ども達もリーダーになれる簡単ゲーム80
- ・黒板メッセージのススメ～忙しい教師のためのコミュニケーションスキル

家本芳郎編  
高嶋和男編  
志賀廣夫編



平成17年10月に中教審答申がだされ、教育改革がいっそう進展します。今後の教育の方向をつかむために。

- ・義務教育改革～その争点と地域・学校の取り組み
- ・ポイント解説 中教審「義務教育改革」答申
- ・最新教育改革ここが知りたい～中教審答申と義務教育改革

小川正人編  
高階玲治編  
菱村幸彦編

### 開館時間のご案内

平日：午前9時から午後9時  
ただし、教育相談は、  
午後5時15分までとします。  
なお、次の日は取り扱いいたしません。  
【土曜日・日曜日・祝日・年末年始】

発行 尼崎市立教育総合センター  
〒661-0024  
尼崎市三反田町1-1-1  
06-6423-3400  
発行者 倉橋 忠  
題字 教育委員長 岡本元興

## 教育総合センター だより

NO.99  
平成18.3.1

### 「真・善・美」を求めて

尼崎市教育委員会

教育次長 高風英洋



昨年5月に33年ぶりに弓道を始めた。きっかけは「自分を律するものが欲しかった。」と言えば少くざらうか。

弓道の最高目標に「真・善・美」というものがある。教本によれば、「真」とは真実の探求、「善」は倫理性、「美」は荘厳美とある。何やら哲学的、禅的な雰囲気がある。

「真の弓は偽らない」、矢はまっすぐ飛ぶから的に偽りはないと言われているが、現実には偽りの矢の連続だ。なかなか当たってくれない。矢を離れたあとは、的中してもしなくても常に心は平静に、礼を失わない、という倫理性が求められる。これは努力すれば何とかかなりそうな気もするが、未熟者の私にとっては、常に平静に自分を律することは非常に難しい。荘厳美を具体的に表現するのは射礼だといわれている。弓を射る動作だけでなく、射場に入ってから退場するまでの手さばき、足さばき、目見え、座る、立つ、進む、退くといった一連の動作に作法が身につけていなければならない。技術・倫理性・作法、これらが揃って初めて荘厳美といわれる美しさが表現できるらしい。

弓道を続ける限りその最高目標である「真・善・美」を探求し続けることになるのであろう。

話は変わるが、最近、人間の倫理観・道徳意識はどうなってしまったのだろうかと思う出来事が相次いでいる。耐震強度偽装問題、ライブドアグループの証取法違反事件、東横インの不正改造問題等々、利益のためならルール違反もお構いなし、ばれなければいい、何とも情けない状況である。

「天網恢恢疎にして漏らさず」のことばどおり、当事者は今、社会の厳しい批判を浴びている。世の中そんなに甘くはないということだろう。事実関係は今後裁判で明らかにされるであろう。

また一方、青少年（子どもたち）の犯罪の凶悪化や小学校における校内暴力の増加が問題化してきている。この問題の根源は、子どもたち自身よりもむしろ子どもたちを育て、教育していかねばならない責任を負っているおとなの側にあるのではないだろうか。親として、人生の先輩として、おとな一人一人がそれぞれの立場で、子どもたちに対し、生きていくうえでの「真・善・美」を語りかけ、教えていかねばならないのではないだろうか。

弓道の場合は狙う的は一つだからまだ射し易い。しかし、相手が子どもの場合にはそうはいかない。「個人はもともと異なるもの」、一人一人育った環境も違えば、考え方、価値観も違う。当然、返ってくる反応も違うだろう。簡単にできるものではない。では、どうすればいいのだろうか。

ここに、ヒントとなる本田宗一郎氏のことばがある。『人を動かすことのできる人は、他人の気持ちになることができる人である。他人の気持ちになれる人というのは自分が悩む。自分が悩まない人は、他人を動かすことはできない。自分が悩んだことのない人は、まず、人を動かすことはできない。』。結局は、自分自身が本気で考え、悩み、そして真剣に子どもたちに接していくことが一番の近道のようなのである。

## 近畿地区教育研究(修)所連盟 研究発表大会に参加して

### フレキシブルな構造の研修施設

平成17年10月28日(金)、和歌山県教育センター学びの丘において、「平成17年度近畿地区教育研究(修)所連盟 研究発表大会」が開催された。同教育センターは、平成17年4月1日にそれまで設置されていた和歌山市内の「和歌山県教育研修センター」から和歌山県南部の田辺市に移転し、同県立情報交流センター「Big・U」内に開所された。文字通り、建物は「U」字の2階建である。採光にも優れた最新の施設設備の1階に配置された研修室は、少人数からの利用にも対応できるように、スペースや情報関連視聴覚機器の利用など大変フレキシブルになっている。

研究発表に先立ち、社団法人アムネスティ・インターナショナル日本の特別顧問であるイーデス・ハンソン氏から「多文化共生社会における私たちの役割とは？」とのテーマで、教育機関の果たす役割の重要性を強調された講演があった。

### 5会場で研究発表

研究発表は、教科・国際教育・情報教育・高等学校教育・教育相談の5領域・5会場に分かれ、全体で15本の発表があった。各会場では熱心な協議がなされた。尼崎市からは、教科(国語科教育)領域の分野で、教育総合センター研究員である濱田玲子(武庫南小学校)及び小寺佳苗(園和小学校)両教諭が発表を行った。

子どもの国語力(読み書き)が話題になっている昨今、特に「書くこと」が不得手といわれる。そこで、指導において、書くことを意識した授業はどうあるべきか、「書く力」を育てるためには、どのような手立てが良いのか?「確かな言葉の力を育てる指導の探求」としたテーマで、平成15年度から2年間にわたり教育総合センター研究部会において、月2回程度の研究会議を重ねた「手紙文」を一つの手立てとした実践研究である。

現職教員による実践を積み上げた研究発表は、発表が調査研究が多い中であって、会場においても高い評価を得た。発表者は貴重な経験と実践研究力を身につけられたに違いない。今後の更なる研究と、現在研究中的教育総合センターの他の研究部会の各方面での発表に期待したい。以下に、発表内容を簡単に紹介する。

### 研究の内容

「確かな言葉の力を育てる指導の探求」-「書くこと」を意識した授業へのアプローチ-として、授業開発を進めるにあたり、系統的な手紙文指導を積み重ねることが「書く力」を育てることにつながると考え、学年に応じた実践(手紙文を手立てとする授業開発)を行うこととした。そこで学習指導要領に基づき、それぞれの学年に応じた手紙文指導におけるねらいを設定した。

低学年	楽しんで伝えたいことを簡単な手紙に書く
中学年	ある程度形式をふまえた手紙を書く
高学年	書式や様式を活用し依頼状、礼状などを書く

以下に、手紙文を手立てとした書く力を育てるための実践事例を示していく。

#### (1) 2年 【「園工展の招待状」】

楽しんで書くことができるような状況を設定する。相手意識を持った招待状を書く活動を取り入れることにした。

#### (2) 3年 【単元「手紙を書こう」】

簡単な形式をふまえ、相手を尊重する手立て。手紙文の特性を生かし、自分の表現を見直すことも指導した。

#### (3) 5年 【「野口シカを用いて」】

思いを手紙で伝えるためには、「形式」と「真情」を大切にしなければならないことに気づかせたいと考えた。

#### <手紙の慣用形式>

頭語	前文	主文	末文	結語	後付け
一番伝えたいこと					
・季節のあいさつ		・相手を気づかう言葉、			
・相手を気づかう言葉		・今後のお願い			
・お礼・おわび、など		・また会いたい気持、など			

### 研究の成果と今後の課題

手紙文の指導は、各実践の子どもの変容からも、年に一度という形で取り扱うのではなく、時と場合、相手に応じて様々な手紙の書き方を使い分ける中でこそ、「形式」や「真情」が生きてくるのではないだろうか。したがって、小学校の低・中・高学年段階に応じて、もっと積極的に機会をとりえて手紙を書かせる必要がある。今後の課題は、手紙文指導の帯単元化ということになる。

(参照:『教育総合センター研究報告書』紀要42号37頁～)  
(研修担当係長 榎野友弥)

## 「不登校の子どもたちへの支援」

本市(尼崎市)では、不登校の子どもたちを支援するため、平成3年から「適応指導教室(はつらつ学級)」を開設している。「はつらつ学級」は、心に悩みがあるため学校生活に適応できず登校しにくい、または不登校状態にある小・中学生を学校以外の教室に集め、集団適応指導、カウンセリング、学力補充等を行い早期に学校へ復帰することを目的としている。

入級については、学校(学級担任)を通じて申込を受けている。入級面談は、教育相談課の担当者以外に学級担任、訪問指導員が関わるなど複数での支援体制をとっている。入級面談に来室されたときには、学校や家庭とは異なった環境でゆっくりと話をすることができ、担任、子ども及び保護者にとっては新鮮で、しかも「はつらつ学級」への入級希望が登校へのきっかけにつながる期待もふくらむようである。

#### 学校復帰までもう一歩

保護者の強い思いと担任の支援があるなかで、A君が「はつらつ学級」へ入級することになった。「はつらつ学級」では、指導員が、学習時間には横に座り、スポーツ活動の時間には声をかけて応援をするなどA君の心に寄り添う指導をして順調な滑り出しのようであった。

しかし、入級して一ヶ月が経った頃、友だちとほとんど会話がなかったことから孤立し始め、「はつらつ学級」でも欠席が続いた。保護者からは体調不良で

欠席するとの連絡が毎朝あった。欠席の原因は、別のところにあると思いつつも見守っていた。

家庭訪問をするが、保護者としてしか会えない状況が続くなか、担任、訪問指導員、「はつらつ学級」の指導員が熱心に保護者の思いに耳を傾けながら、子どもへの関わりについて相談を続けた。そして、教育相談課でA君と保護者の面接相談を進めたところ、週一回の面接相談と平行しながら「はつらつ学級」に通級することになった。

A君は保護者の強い思いに支えられ、不安を乗り越え、二学期初めから再び通級を始めた。本人と保護者が面接相談を受けながら、一つ一つ課題を克服し、「はつらつ学級」に一日も欠席せず通級している。学校への復帰にはまだ時間はかかるものの確実に自分のペースをつかみ、一步一步学校に近づいている。今後、学校、「はつらつ学級」、訪問指導員が連携し、子ども及び保護者を支援していくことが学校復帰へつながると考えている。

不登校の子どもには、本人に起因する課題、家庭環境に起因する問題など様々な要因がある。保護者、学校、相談機関等が連携を密にし、しかも、保護者の思い、背後にある家庭環境を視野に入れた状況把握を行い、子どもの状態を予測して支援していくことが望まれる。

(適応指導担当係長 平垣新一)